『加害者探求』についての補足

〈翻訳の洪明花さんがク・ジャヘさんに行ったインタビューの一部を参考として、また本文中の言葉に関しての注釈を掲載いたします。インタビューの全文は、日韓演劇交流センターのホーム・ページ（https://tckj.org/）に掲載されています〉

○“公的発話”という言葉が印象的ですが、どういう意味ですか？

「演劇は、いくら現実に基づいていると言っても、劇場では、物語性やイリュージョン、そして観客の感情が生まれ、言葉との距離を保つことの難しいジャンルだと思います。目の前で、生きている人間が演じているのに、観客が物語に入り込んでいく現象を不思議に思いました。更にそこに創作者側の美学や演劇的表現が加わり、“それっぽい芸術”が生まれてしまいます。“公的発話”は、劇中での言葉が、劇場だけに留まらないようにと考えて作られました。簡単に発言したことが大きな意味を持つ可能性もあります。人物の感情の噴出のためではなく、彼らの発した言葉が、劇場の外まで越えていくための戦略です。例えば、二人の人間が会話をする時、それが二人の間に起こる私的な次元の会話にならないように気をつけます。そのためには、目標が必要です。例えば、二人の人間の会話を通じて、これまで否定され続けてきた少数者たちの権利に対する社会的合意を宣言するとか、人物の正当性を持たせるとか、その事件がなぜ起こったかを伝えるなど、目標を明確にして会話します。これが“公的発話”です。演劇で大切なことは会話と言いますよね。物語の中で、表面的には二人の人物の会話のようだけれども、その会話を通じて、問題点を見つめるようになる。人物を演じている俳優の意識の比重を高める方法です。」

※『加害者探求』の注釈

（注釈1）習作生　文学や芸術界でその専門を学んでいる過程にあるものを指す

（注釈2）学校　原文では「正式学校」と記されている。作家の造語。韓国では演劇映画や美術、文学など、芸術を学ぶための専門分野に特化した学校法人が多くあるが、逆にその学校に通っていないと認めないという傾向もあり、芸術家になるための正式な道という皮肉を込めたという。

（注釈3）“花瓶（コッピョン）”“霜降り牛（コットゥンシム）”
韓国語で『花』を『コッ』と言う。原文では、音と意味をひっかけることによって、この二つを例としてあげられている。

（注釈4）…（点点点）　他の句読点と同じように、文書に記されている『…』を音にして読み上げる。

加害者探求
付録：謝罪文作成ガイド

制作：南山芸術センター / ここは当然、劇場
作：ク・ジャヘ
翻訳：洪明花

凡例

加害に関する歴史を記録する本書「加害者探求」は、全て、自発的参加によって作成され、完成と同時に燃やされるものとする。作成それ自体に意味があると考えるためである。この書において“この世界”と表記されているものは、芸術ジャンルに特定されるものではない。世の中の全ての芸術は詩性を備えている。国語辞典によると、“詩性”とは全ての芸術に共通する性質であり、その核心的な属性であると定義されている。芸術そのものを“詩”とし、芸術に携わる者は“詩人”、未だ“詩人”ではなく志望している者を“習作生（注１）”とし、芸術界を“この世界”と表記する。

大前提

大前提。
“詩は、決してニュアンスだけに留まってはならない。詩は、世の中に対する探求である。詩はそれ自体である。詩は、事前に理論を定め、それを芸術的に具現化し表現するものではなく、探求それ自体を通じて世の中の理論を作り出す哲学的な探求である。”
私がこの世界に入るため、学校（注２）に入学した時に先生が言った言葉です。
”詩は探求である。探求であらねばならない”
今、私は週に一度、先生が立っていたその壇上で、同じ事を言っています。
その言葉がどういう意味なのか、まだ正確にはわかっていません。しかしいつかは理解できることでしょう。尊敬の意を表します。勇気を出してくれた詩人たちに感謝します。二度とあのようなことが起きてはならない。これ以上あのようなことが起こることのないよう、我々は探求し続けなければなりません。今こそ、口を開きます。ページを進めたいと思います。切に申し上げます。
“これはこの記録の大前提にならなければなりません。”推薦の辞。

推薦の辞

「詩を書きたいのか、この世界に入りたいのか。私と寝たら少しはいい詩を書けるようになるだろう。しかしウソはやめよう。君の詩がよくなるのは一瞬だけかもしれない。詩人なら、自分の人生を自ら破壊することを知らなければならない。自滅の中、よろめきながらも歩いて行く。それこそが詩人の生き方だ。セックスをしたことはあるのか？顔を見ればわかる。セックスの経験がある人間かそうでないか。どのぐらいしているのか、定期的なパートナーがいるのか、自慰行為をするのか。手でするのか道具を使うのか。ホモファーベル。君はホモファーベルを知っているか？分厚い唇がピクピクと動くのを見る限り、どうやら私はあちらの世界では通用しないユーモアを言ったようだな。そう。君はこの世界ではない、あちらの世界の人間なのだから。君の父親とやってきなさい。そうすれば、今君が書いている十点の詩は十三点になるだろう。そんなにこの世界に入りたいのなら、私が代わりに書いてやってもいい。心配しなくていい。君のレベルに合わせてあげるから。君は私が言うことを書けばいいだけだ。とりあえずこの世界に入れる程度に書いてやる。そこから先は君次第だ。すぐに消えるか消えないか。私の家に来なさい。ワインを一本、ビール二本、焼酎を一本持って。週に一度、夜十時。一分でも遅れたら、君の詩は私が書いたと暴露する。私には失うものなどない。人々は、私が詩を書きすぎて、少し気が触れたと思うだけだ。詩を書いて生きるということは、狂乱と破滅がつきものだ。胃が腐り、食道が焼けつき、肺が悲鳴をあげても、毎晩酒を飲み、自己の破滅を体全身で感じながら、嫉妬に満ちた憧憬を持ってあちらの世界をじっと見つめ、この世界の言葉で書きとめる人間。それこそがこの世界に属する私たちだ。虚構以上に虚構のような人生を生きる人間。どこに旗を立てればいいのか、旗を立てる場所を求めて彷徨う人間。生涯、詩しか知らない人間。わかるかい？もし君が詩人になったとしてもきっと君にはわからない。世の中には知る者と知らない者が存在するのだ。

（注３）例えば、花瓶と花が咲き乱れるような霜降りの牛肉にとってはそんな世界を知る必要もない。花瓶と霜降り牛。どちらも美しい。君はどっちだ？どちらでもいいか。花が美しく咲き乱れるように脂身の入った霜降りをマーブリングと言う。知っているだろう？前に私が御馳走したじゃないか。花瓶は、割れたらおしまいだ。それも知っているだろう？」

君はこんなことを言ったね。私は詩人だ。もともとこの世界に生まれてきた。いや、もともというよりも元来という方が正しいのか？いや、生まれたというより投げ捨てられた？そして君のへその緒はそこで切れた。君はこの世界で、多くの詩を吐き出した。しかし、君は今、別の存在としてここに立たなければならない。君はこの記録の歴史に参同し、この記録を支援する。そして連帯する。ロマン・ポランスキーは未成年者を強姦し、梶原一騎は女優をボロボロにし、“ラスト・タンゴ・イン・パリ”を作った巨匠ベルトルッチ監督は、強姦シーンを撮影するために実際に女優を強姦した。詩のために花瓶を割り、踏みつぶしたのだ。

君は、世の中の人々が西洋の詩人だけを偉大に思っていると考えた。君たちの集まりの席で自嘲的にこんな話をしたことがある。“なぜ私たちは西洋詩人のような待遇を受けられな

いのだろうか？地球は丸く、私たちも活躍しているのに”。そう言いながらビクビクと周囲を見回した。君たちを見つめながらも、コソコソとした視線が至る所に存在しているから。もはやこれ以上君は君に寛大ではいられない。詩人は自分自身に最も厳しくあらねばならない。君は君自身を告発するのだ。君は君自身を嫌悪した。運が良かっただけだ。誰も君を告発しなかった。…（点点点）（注４）。石を投げられる覚悟で言おう。君はただの一度も自分を尊重しろと言った事はない。権威を主張したことはない。君は、ただ詩人として存在しただけ。君が主張せずとも自然に君の権威が生まれ、人々は、自ら、その権威に服従したのかもしれない。もはやそんなことは重要ではない。君は今こそ君自身を告発する。今こそ君自身の嫌悪を嫌悪する。今こそこの世界の亀裂に目を背けず、君自身に銃口を向けるのだ。元来、狂人として生まれ、加害者となった君自身に気づかない振りをせず、加害者たちの銃口が狙っている方向をしっかり見据え、より徹底的に記録すること。この世界の言葉で。この世界の言葉で記録することによって、愚かにも全てを美化し、自分の告白に感傷的になり卑怯な弱者面などできない、最も凄絶な自己反省の記録になること。最も論理的で理性的な分析と探求を通じ、加害の歴史を追跡する唯一の記録になること。この記録を通じ、君はその破廉恥な加害者を追跡する。ここに呼び出し、質問する。過ちはなんなのか。要求する。正式に謝罪することを。それを記録する。そしてこの世界から追放する。“詩は探求である。探求であらねばならない。”この世界はそれほど甘くないということを世の中の人々に告げること、これこそがそれだ。君自身に引き金を引くのだ。バン。推薦の辞。

推薦の辞

推薦の辞．この世界の言語を詮索するのではなく探求しなければならないということに同意し連帯します。憤怒します。これ以上黙ってはいません。しかしその前に、彼がとった行動や言葉に対し、総体的にアプローチする必要があると考えます。様々な状況及びその要因を考慮しなければなりません。彼がそのような行動をとるしかなかった、誰も気づかないほど微細な影響を及ぼした全てについて分析しなければなりません。二度とこのようなことが起こらないようにするためです。この世界に属しているという理由だけで黙認されてきた慣習や悪徳を暴露することによって、私たちはこの世界の崩壊を防ぐことができます。もともとそんな風に生まれてきた人間はいないと思います。彼の置かれている状況には、個人を圧倒する力があります。それはこの世界に属した全ての人間もまた同じであり、拒否できない、状況の力です。私の詩は、人間の倦怠と醜さを描いています。しかし私は、私の書く詩とは違い、善良な人間です。全ての人間もまた善良です。私たちは、この事態を個人の性質の問題とだけ考えてはなりません。加害の原因を、個人主義的思考だけに起因していると考えるのではなく、様々な状況要因を考慮することを、この書の重要なチャプターとすることを提案します。私がこの書で占める役割は重要ではありません。この記録の歴史に加わることができるだけでも、私にとっては充分に、光栄であります。

推薦の辞

推薦の辞。様々な状況要因を考慮することに同意し、連帯します。“…” などはありません。私は加害者の師です。彼を呼び出し涙が出るぐらいひどく叱ってやるつもりでしたが、既にあいつは行方をくらました後でした。今、私の手元には、あいつが、自分の弟子であり、この世界に入ることのできなかった二十三歳の女性に送った手紙だけがあります。私は、私の弟子だったあいつが、あんなことをしでかしたという事実に胸が引きちぎられる思いです。また、今ごろ、ボロボロの体を引きずってだらだらと血を流しながらどこかに隠れてうめき声を上げているであろう弟子のことを思うと胸が張り裂けそうです。だからと言って、今、波紋を広げている暴露と告発が、私たちの、この世界に対する根拠のない攻撃と考えているわけではありません。当然罰を受けるべきだと思っています。師が、弟子の犯した行為を、自分のこととして、自分の指導が間違っていたと深く反省しながらも、弟子への変わりない愛情と関心を惜しみなく注ぐなどと、そんなことはこの世界の師弟関係に存在しない、などと、そんな言い逃れをするよりも、これは美徳であり使命だと考えています。あいつが二十代前半に書いた詩を覚えています。言葉がぎっしり詰まっていました。私は言いました。「詩を書けと言ったのにうんこをしたのか。何もかも言おうとするな」一つずつカットしました。歯を食いしばりながら私を見つめる若い詩人の、鹿のような瞳は今も鮮明に目に焼き付いています。結局、あいつの書いた詩は、点と丸だけが残り、そして、その「詩」をもってして、彼は、この世界に入ることができたのです。

長い間。

うそをつきました。行方をくらましていた彼は、泣きながら私の家に来ました。結婚したばかりの彼の顔はげっそりしていました。泣いていたようです。
これ以上詩を書けないと。彼は深刻な PTSD に苦しんでいます。

推薦の辞（4）　PTSD. Post Traumatic Stress Disorder. 外傷から来るストレス障害。

加害者のトラウマです。

再度。推薦の辞。これはこの記録のどこに記されてもかまいません。ただ記録さえしてもらえれば。加害者のトラウマを加味して、加害者が属しているこの世界への探求が前提とならなければならないからです。いったいこの世界がなにもので、なぜこのような加害の歴史が無限に繰り返されているのかを知るためです。これは最も苦しい記録になることでしょう。

推薦の辞

推薦の辞。この世界に対する探求が前提でなければならないという点において同意します。同時に多数の被害者たちの行動に見られるパターンの分析を提案します。はい。連帯します。この世界で付録の付録にすらなれない私がこのような話をしてもよいのでしょうか？私はこのような場に立つに値しない人間かも知れません。もちろんこの世界に属してはいます。しかしこの世界に入ったものの、これという詩を書けていません。発表はしましたが、全く注目されませんでした。私自身、自分の詩がどこに向かっているのかわかっていないので、あまり気にはしませんでした。わかっている人間などいるのでしょうか？私がこの場に立っている理由は、皮肉にも、ここに立つ資格のある友人たちが出て来なかったからです。つまり沈黙したのです。私がこれからお話ししようとしていることは枝葉の一枚でしかないと攻撃されるかもしれません。しかし、芸術は末端の蓄積だと教えてくれませんでしたか？私が注目するのは、加害事実の明確な加害者たちが書いた、詩人が書いたなどと言うのもおこがましい、謝罪文についてです。過ちを認める謝罪文を作成した後、道義的責任は認めるが法的責任はないと言葉を変え、虚偽事実による名誉毀損をあれこれと主張し、数名は被害者を逆告訴しました。当初の謝罪文が正当性を備えていれば、私たちがこうやってここに立つ必要があったでしょうか？詩人が自分の詩で語るように、加害者は自身が書いた謝罪文で謝るべきです。謝罪文には、決して踏み込んではならないものがあるのです。加害者たちと私は、学生時代からの友人でした。トークルームも作っていました。そこで私が何か送っても、彼らからのまともな回答はなく、形式的な返答だけでした。会う約束は、私の入っていない別のトークルームでやり取りしているようでした。メッセージが入りました。「こんな風に謝罪文をあげようと思う」。はい。私は幾つか指摘しました。“その文言は消しなさい。その副詞はふさわしくない。もっと具体的に書きなさい。何に対して謝罪しようとしているのか”。返答はありませんでした。私は最後まで言い続けました。“君は犯した失敗を隠そうとあせっているようだ。君たちが大好きな先生が言っていただろう？話すなら全てを、話さないなら何も言うな。本当に非を認めているのか？謝罪文作成ガイドブックでも読んでみなさい。まあ、そんなものがあるかどうか知らないが”。

多分、この言葉が彼らの引き金となったのでしょう。バン！その後も永遠に返答はなく、くだらない謝罪文もそれ以上はアップされませんでした。この世界はそれほど甘くありません。簡単に居場所を譲ってくれるような世界ではありません。彼らがいなくなったことによって、彼らが立つはずだった場所に私が立っていることがやりきれません。私は、普段からこの世界を自嘲的に批判しているので、この場で大きな影響を与えるなどできないことはよくわかっています。しかし、私のような末端クラスの詩人が、一人ぐらい適度に混ざってこそバランスがとれる。だから私を呼んだのでしょう。この記録の歴史をより客観的に、そして攻撃的に記録するために、この世界に属しながらも、この世界の典型的な詩人ではない私がここに並ぶことが、必要なのだろうと考えます。

推薦の辞

推薦の辞：私も同じく連帯します。

推薦の辞（3）
総評。この詩人は不惑のひよっこに過ぎませんが、既にこの世界で私たちと肩を並べている中堅です。不細工でしょう？習作生の若い女性たちから愛されるなど不可能で、だからこそ自分の詩を創作することだけに没頭でき、そのおかげで、ここに私たちと並んで立つことができました。

再度、推薦の辞

しかし先生、女性は素晴らしい詩を書くことさえできれば、不細工な男性の方を好みます。再度、推薦の辞。声を上げて叫ぶことは暴力です。びっくりマーク。この世界が、告発や暴露によって残酷に破壊されています。何の罪も犯していない詩人たちが避難を浴びているこの世界のために、ここに出て、書いています。私はこの残酷さの中に恐れ多くも立ち上がり、二つを提案したいと思います。一つ、より健全なこの世界のために、この事態に痛烈な怒りを持って、より冷徹に分析すること。加害者を擁護していると誤解されるかもしれない言葉も勇気を持って発言します。私の言葉など大きな影響を与えないであろうこともわかっています。私もまた末端、いえ、ひよっこの一人に過ぎないのですから。しかし、私は自分の居場所を求めてここに立っているのではありません。人々が、窮地に立たされた思いで、加害者たちへの非難だけに走る可能性を憂い、ここに出て来た次第です。私など、せいぜい付録の付録程度です。
二つ目、この世界だけでなくあちらの世界の事例も隅々まで検討すること。一冊の本に全てを納めることは不可能です。従ってトゥリロジー trilogy、即ち、三部作として作成することを提案します。この世界の加害の歴史だけでなく、あちらの世界の事例も記載するべきです。楽しみにして下さい。この記録はこの世界だけでなく、あちらの世界の加害の歴史にまで及ぶ、大装丁の記録書となるでしょう。
スポーツ、大学のキャンパス、家族、恋人、職場など、全てにおいて、あちらの世界まで広がるでしょう。内部の自浄作用だけに留まらず、より巨視的な視点によるアプローチと分析で、この世界とあちらの世界の自浄作用に貢献しなければなりません。この世界は宇宙の中心だからです。もちろん加害者を処罰することだけがこの記録の目的になってはなりません。世界の知性、ハンナ・アーレントは悪の陳腐さについて述べました。しかし私たちは加害者の悪を備えた陳腐さという罠に陥らず、より熾烈に加害者探求に踏み込まなければなりません。
またもう一つの知性、スーザン・ソンタグは彼女の著書『他者の苦痛へのまなざし』で言

及しているように、私たちは加害者の苦痛をただのイメージやスペクタクルで捉えてはなりません。誰の苦痛にどのように移入するか、これこそが現代の倫理感覚です。これが、この記録の核心テーゼです。

解説

解説。
この記録の半分を占める長い推薦の序文におつきあい頂きありがとうございます。
この書は、歴史上、最も長い序文を持つ書として記録されることでしょう。
この世界の主である我々が、この世界で起きた加害の歴史を直接記録するにあたり、多くの危惧の声がありました。実際、そういった危惧の声を排除しようとしたのは事実です。その危惧の声まで考慮してしまうと、加害の本質またはこの記録の目標がぼやけると判断したからです。危惧というのは次のようなものです。確認されていない事実によって加害者たちの名誉毀損が考えられる点、悪用する被害者が存在する点、話題性に便乗し、過度に大きな恐怖をあおっている点、この世界特有の過度な感受性に偏っている点、もっと大きな問題を直視しなければならないこの世界の方向性に対する問題提起などがあります。
危惧が多いということは、それほどこの書の持つ責任が大きいと考えられます。私たちは、加害の本質を曖昧にしないために、これらの危惧を考慮しないことにしたのです。しかし、この記録の歴史をより堅固なものにするために、これらの危惧を、やはりこの記録の一ページとして加えることにしました。
また、私は、私が立っているこの場を退きます。この世界は、消え去るもの、疎外されるもののためにあるのです。誰からも注目されなかった女性たちを抱きしめようと努力することがこの世界の主たる声だったように、私たちは付録としてすら考えられていなかった小さな声たちをこの書の重要なチャプターとすることによって、既存のやり方に安住はしません。自らを付録の付録にすらなれない詩人と呼ぶ詩人は、謝罪文作成ガイドを提案します。
一流詩人だけがこの世界に存在するのではありません。私は、決して、彼が付録の付録にすらなれない詩人とは思っていません。
私がこの場を退くと共に、彼が提案したものをこの記録の一ページに加えたいと思います。次の世代に席を譲るべきだと思っています。従って、この書の本文を執筆できる権限は、この世界の主となる我々の弟子たちにあるのです。この書は、作成それ自体に意味があるものであり、疎外されたものを見つめ直し、これこそが歴史とならなければならないからです。これ以上沈黙してはいられません。

加害者探求
― 付録：謝罪文作成ガイド

遠くに、体のラインが現れ、膝丈の白いワンピースを着た女が、
ぼんやりとどこか遠くを眺めている。
墓、もしくは女の豊満な胸のようにも見える。
少女かもしれない。
ぼんやりと消えていく。
文字がだんだん浮かび上がる。

推薦の辞を述べた人々が立ち、独自的で個別の存在となり、遠くを見つめている。
女性のイメージまたは声が消え、
彼らの姿だけが表紙の絵となって残る。

“この世界を記録するためにここに立つ。まる。括弧、他人の苦痛に耐えられず、括弧閉じる、世界に向けて泣き、点、世界を書いた、点、そして愛した。まる。泣き、書き、愛した。まる。私たちは他人の苦痛を愛そうと、生涯を涙を流して過ごす人間である。よって私たちは、懺悔の心で、点、座って書くのではなく、点、この場に立って、書く。…（点点点）。真に謝罪が伝わるには、その傷は深すぎると思うから。まる。この書は、懺悔の心で、一行一行したためていく、点、この世界に起こった加害の歴史、まる。生来の狂人として生まれ、この世界で加害者になるしかなかった詩人たちが自ら記録し、自ら罰を下す、最初で最後の唯一の一冊、まる。“

目次

推薦の辞
推薦の辞 1.
推薦の辞 2.
推薦の辞 3.
推薦の辞 4.
推薦の辞 5.

1. 狂人を追跡する。
1 − 1. 狂人はどのようにして加害者となるのか—狂人の手紙を通して。
1 − 2. 狂人はどのようにして誕生するのか—狂人の仲間を通して。

2. この世界とは何か。
ウォルター・ペイター、ボードレール、トーマス・マン、ジェームズ・ジョイス、ゲーテ、マーシャル・バーマン、マルクス

#. 付録—謝罪文作成ガイド
この世界の中の狂人：トーマス・マンの『トーニオ・クレーガー』に属する狂人の苦痛

謝罪文

3. 危惧（提言）
−活用、悪用、虚偽、暴力、名誉毀損、背後

4. 後記、もしくは作家の言葉

― この世界の全ての A, B, C のために ―

1. 狂人を追跡する。

1 － 1. 狂人はどのようにして加害者となるのか　－狂人の手紙－

先生が話す。

0. 加害者はいなくなりました。加害者の手紙だけが残っています。個人的な関係は深くありませんでした。師と弟子の関係でしたから。今、私の手元には、加害者である私の弟子 Q が、彼女にあてて書いた手紙だけが残っています。

“多くの人が集う新村（シンチョン）の飲み屋。僕は君を見た。
君は店の一番端に静かに座り、隣の人の話に耳を傾けていた。
君が座れる場所はそこしかなかった。
僕もまた、厳しい習作の時間を過ごしていた。僕は、周囲に溶け込まず一人ポツンと座っている君を見ていた。君は聞き役だった。君は一口ずつ酒を含んだ。君はタバコを吸いそうに見えた。しかし君はタバコを吸わない女性だった。君は時折、人々の吸う煙草の煙をぼんやりと見つめていた。君と話していた詩人がしばらく席を空けると、君はその詩人が座っていた席をぼんやり見つめていた。その詩人が座っていた臀部の跡が鮮明に残っている、少しへコんだ席をぼんやりと見つめていた。
多くの詩人たちが騒がしく喋りたてるこの世界のセレブたちの中で、君は透明人間だった。僕は、こんなことを思っていたようだ。“君を救いたい” いや、むしろ僕は君に救ってほしかったのかもしれない。一人で座っている君の横に座り、君の存在を浮かび上がらせたかった。子供の頃から虚空だけを見つめ、いつもいじめられていた僕の姿を見たと言うと、それは僕の錯覚だろうか。しかし僕は知っている。生きるということは錯覚だと言うことを。僕は君に近づいた。そして僕たちは手をつないで店を出た。間。天地が創造されるように、僕は毎日君に会った。僕たちは六日目のデートまで寝なかった。七日目、君と僕は僕の作業部屋のソファーに横たわった。僕は、そのソファーに横たわった多くの女性たちの魂を感じた。その途端、息ができなくなった。“彼女たちが僕に息をさせてくれない”。僕はこれからも君に死を訴えるだろう。その度に君は、深夜の割増タクシーに乗って、夜行列車に乗って、僕の元へ来て、僕は君の胸に抱かれるんだ。
ボタンのついたシルクのブラウスを着て、会いにきてほしい。首元が少し伸びて、かがむと胸の谷間が少し見える、動物のキャラクターが描かれた T シャツでもいい。ブラウスを着てくるなら、ボタンを、とてもゆっくりと、満月の夜にクルミを剝くように、熊のキャラクター T シャツを着てくるなら、水辺で子どもに服を脱がせるように、万歳をさせて脱がせよう。僕は君に抱かれるが、君はいつも僕の下に横たわり、僕が求めると膝をつく。ズボンは脱がさない。僕は、女性の陰毛が生えた性器を見たくないんだ。胸を触るのもあ

まり好きじゃない。細めのズボンの中にスッと手を入れるのがいいんだ。君が濡れていなかったら、僕は思いきり掴んであげる。僕の大好きな尊敬する先輩が書いた詩がある。淋しくて美しい詩。詩人である夫が、書けずに、部屋に籠もって一文字一文字、必死で絞り出している。生活人である妻が、庭で村の奥さん連中とにんにくか何かを剝きながら、詩人の夫が書く詩について好き勝手に言っている声が聞こえてくる。癇癪を起こした夫は厨房に走り包丁を手に叫んだ。“この世界が俺をズタズタに引き裂くんだ！”村の奥さん連中は驚いて悲鳴をあげたその瞬間、生理になった。
そんなふうに、世界を力強くわしづかみにすれば、君たちは濡れるんだ。その夜、詩人と生活人の妻は、激しく体をぶつけ合って仲直りする。君に、僕の予定された死を告げると、君はいつでも飛んで来るんだ。すぐに飛んで来なければならない。全ての女性たちのように。僕は知らなかった。「生きるということ」は錯覚だということを。君が僕を愛していたと思っていたけれど、それは「生」の最も大きな錯覚だったということを。愛する女性に訴えられることを。それも SNS で。そして僕を愛した全ての女性たちが、一人残らず、僕との営みを告発したということ。ありえない。「生」そのものが僕を錯覚させたこと。
この暗闇の中で、僕は今、誰に向かって旗をあげ、飛んで行けばいいのか”

Q, あいつは、自分を告訴した女性にラブレターを書き続けました。
私はいつも言いました。“Q, 君の詩にはパターンがある。すぐにわかってしまう。全てを言うな。消しなさい。詩は全てを言葉にするものではない。”彼はできないと言いました。

数日後、土砂降りの雨の夜。Q が先生を訪ねます。ドアを叩きます。
“僕にはどうしてもできません。先生が消して下さい。”
“君が自分で消しなさい。それが詩人だ。”
“できません。”
“消すんだ。”
あいつの手は震えていました。とても気の弱い奴でした。繊細でもろく。
“消すんだ”
“はい…（点点点）”間
“消しなさい”
“ここまでだけ”
“だめだ。もっと”
“え？”
“もっとだ。”
“もっとですか？”
“もっと！”
“先生、それだけは”
“もっとだ！”

“僕にはとても”
“もっとだ！”
“できません、これ以上は”
“もっと！もっと！もっと！”
あいつはほとんど気絶に近い状態でした。はい、私があいつの詩を消して、はい、私があいつの詩を選んで、はい、私があいつをこの世界に入れました。
“先生。詩を書くということは野蛮で不穏な行為だということは僕も感じています。だけど、だからと言って、この事実が、僕に詩を書くことをやめさせることはできません”

あいつ、Qは今どこにいるのでしょうか？私は多くのQにこう言いました。
“全てを書くな。しかし全てを書かねばならない“
今、この詩にもパターンがあります。
Q、もし君が、あの時あそこで、君の向かい側にいる詩人の冗談を、冗談として受けとめることのできる柔軟な人間だったら？
Q、もし君が、あの時、もっと他人と協調しあえる明るい性格だったら？だからね、Q、もし君が、目の前の会話に集中する努力のできる、少しでも社会性のある人間だったら？
Q、君が恥ずかしそうにキョロキョロ周りを見回し、彼女を発見しなかったら？
Q、先に発見したのは君だけれど、彼女が君の目を、あんなにも穴のあくほど見つめなかったら？彼女が三十代のガリガリでメガネをかけ、神経の衰弱した女性だったら？彼女と話していたその男が席を立たなかったら？
Q、君がその女性に近づこうとした瞬間、誰かが君に話しかけていたら？もしその時その女性が…。
もし、その女性がもし、その時。多くの被害者たちの行動パターンの分析を提案します。もし、その時、その女性がその席に座らなかったら？もし、その時その女性が髪をまとめていなかったら？その女性のうなじに、可愛らしい産毛が見えなかったら？もしその女性の父親が厳格で、彼女に門限があったら？彼女がそんな遅い時間に、詩人たちが詩の世界について夜明けまで討論しているその席で、大量の酒を飲み食いし、そんなにも遅い時間まで残っていなかったら？彼女の顔がもっと大きかったら？もしその席に習作生の彼女が入って来なかったら？
詩人が集まるその席にいた女学生は、黄色い髪にミニスカート姿のチェ・スヨンただ一人でした。写真の中の彼女は、Qと一緒に明るく笑っている。そんな習作生だった。。もともと利口ではない彼女は、Q、君に出会って、無償で賢くなれたんだ。タダ乗りするような彼女たちに出会ったことが問題だったんだ。問題のない女性に出会うべきだった。尤も、だからと言ってそういう女性に、Q、君は魅力を感じないだろう。Q、君はまるでそうなることが定められたパズルのような絵の中に座っていただけだ。Q、君は彼女という独立変数からの従属変数だっただけだ。君はあまりにも詩人でありすぎた。Q、君の加害はそうやって生まれた。もともとこの世界に来たこともない女性は、生活人として幸せに暮らせたのに、

なぜあえてこの世界に入り、月桂樹の葉を一枚摘み取ろうと、愚かな小細工するのだろう？なぜ女性は大邱（テグ）からソウルまでやってきてその席に座っていたのだろう？なぜ君は彼女に惚れてしまったのだろう？なぜ君は狂人から加害者になってしまったのだろう？

1. それから七年が過ぎたそうです。
   なぜ彼女は、その時に声を上げず、長い時間が過ぎた今、声を上げているのでしょうか？先生が言ったように、Qはとても弱い人間でした。もちろん彼がこんな風に言い回っていることを私はよくは思っていません。
   “僕はこの世界で有名な詩人たちをたくさん知っている。君、詩人Cを好きだって言ってただろ？Cと僕は学校時代からの友達で、Cは詩が書けない時、よく僕に弱音を吐いていた。僕たち詩人は可愛いところがあるんだ。Cが発表した詩を見た時、正直、嫉妬で狂いそうだった。Cに会わせてあげようか？今、呼べるよ。Cは寝てるだろうな。Cは、いつも昼間から酒を飲んで、今ごろは完全にダウンしてるんだ。そして明け方に起きて詩を書く。近いうちに会わせてあげるよ”はい、私がそのCです。彼女と一緒にQに会ったことがあります。

2. 学校に通っていた時、飲み会でこんな言葉を聞いたことがあります。先生が、私がつきあっていた女性詩人にこう言ったんです。彼女は、最初にこの世界に入った優等生で、僕はまだまだでした。“詩を書きたいのかね？詩人なら自ら人生を破壊できなければならない。自滅の中でよろめきながら歩く。それが詩人の生き方だ。彼氏とはどこまで行ったんだ？南山タワーに行ったと言おうとしただろ？詩人はユーモアがなくては。私は顔を見ればわかる。たまに自慰行為をするのも悪いことじゃない。人間はホモファーベルじゃないか。父親とは仲いいのかい？子供の頃はオムツを替えてくれただろう？父親はオムツを替えながら何を考えていたんだろうね？この世界に入るのは、思ったより簡単だっただろ？大変なのはその後だ。君は既にこの世界に入り、私の授業を熱心に聴いている。私は非常に気分が良かった。このタバコの煙にまみれた何気ない言葉もちゃんと覚えておくんだ。君よりも前にこの世界に入ってきた君の先輩は、飲み会ではいつも私の横に座り、私のたいして面白くない冗談に大きくうなずいていた。覚えておこうとしたのだろう。そしてある日、覚えたことをどこかで言おうとして気が触れた。詩を書くということはそういうことだ。気が狂い、壊れずに生きられない。毎晩僕と飲んだ。人生で、どこに旗を立てればいいのかわからないと泣いていた。だから私がその旗を立ててやろうと言ったんだ。君に。”

3. なぜこの話を聞いた時に、すぐに話さなかったのでしょう？なぜ一人の人間が口を開くと別の者も口を開き、また次の者が続くのでしょう。怖くないのでしょうか？習作生だから失うものがないのでしょうか？なぜ群れるのでしょうか？女性たちはもともとトイレに一緒に行く生きものだったのでしょうか？なぜ自分の言葉で話さず、他人の言葉に

便乗するのでしょうか？なぜ薬を飲んで精神病院に入院したと騒ぐのでしょうか？なぜメンタルも弱いくせに、この世界に入りたいと必死にもがくのでしょうか？なぜ自分のことでもないのに、他人を慰めるために多くの時間を費やすのでしょうか？大人ならばこんなことは、聞き流すべきではないでしょうか？数日前、雑誌にこんな逸話が載っていました。ある監督がオーディションで女優たちにスカートをあげるように言いました。女優たちはスカートをまくりあげました。誰が選ばれたと思います？それを断った女優です。その女優は、こう言ったそうです。“私で映画を撮ってくれれば、その要求は叶います。” パターンが見受けられます。翌日、先生の言った言葉が大学新聞に載りました。歪曲された間違いだらけのものでした。覚えのある潜在被害者たちがみな、ひと言ずつ付け加え、先生は学校を去りました。先生から詩を学ぶために、苦労してアルバイトをしながら登録金を捻出していた習作生たちの受講権利は剥奪されました。“人間はみんな死にます”“ソクラテスもまた人間でした”“従って、ソクラテスは死にました”“声をあげることは暴力です”“彼女たちは声をあげました”“彼女たちは無自覚のもとに暴力的になったのではないでしょうか？確証のない発言で、彼を射殺したのではないでしょうか？”

彼女たち、N。彼の実名をあげ、彼がこれまで築きあげてきた詩の世界を破壊しました。バカにした。嘲笑った。そう言って彼女たちＮは、多くの彼にぬぐいさることのできない傷を与えました。彼女たちの詩を選ばなかったのは、彼女たちの問題ではなく、彼女たちが書いた詩が詩ではなかったからです。「生きる」ということは錯覚でしょうか？ N。

1 − 2. 狂人はどうやっ−て生まれるのか？　−狂人の仲間たちを通じて−

0. 飲みの席で私に、彼女のことを話したことがあります。この世界に入りたいという二十歳とつきあっていたと。私まで彼女に会ったことがあると錯覚してしまう程、とても鮮やかに描写してくれました。彼女のパンティーに手を入れることが好きで、乱暴だったと言いました。乱暴なのが好きだったようです。一生、習作生のまま終えてしまうかもしれない不安を抱えて生きていくとはどんな気持ちでしょうか？この世界の周りをうろつき、そんな気持ちに気づかないフリをしてなら生きられるかもしれません。その友人Ｃは愚かではありませんでした。少し遅くはありますが、着々と時間をかけたおかげで、三十五歳でようやく習作生の看板を外すことができました。その友人が二十代前半に書いた詩を覚えています。ひどいものでした。私たちは同じ先生から詩を学びました。先生はこう言いました。“全てを語るな。自信がない？ならば全てを語れ” 先生はその友人にだけ厳しくあたりました。先生が直接、カットしました。私はうらやましかったです。なぜなら、先生は私の詩に対してはひと言も言ってくれなかったからです。私は一人で書かなければなりませんでした。私が一人で一文字一文字したためている間、その友人の詩は、結局、点と丸だけになり、その友人は句読点だけが残ったその詩で、この世

界に入りました。私のように。C。

彼女の小さな胸が気に入ったと言っていました。C カップぐらいだったと思います。

H。普段からよく死にたいと口にする詩人だったそうです。 しかし、いくら死にたいから　と言って、わざわざ男に言う必要はないでしょう。ですから同僚の詩人たちはみな、H がそんな精神的疾病を患っているとは知りませんでした。例えば、“明日の明け方二時三十七分まで生きる”とか、“死のうと思っていた。今年の正月、よそから着物を一反もらった。着物の布地は麻であった。鼠色の細かい縞目が織り込められていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思った”太宰治の小説の一説です。女たちはそんなくだらない話が好きなのか、H の作業部屋に通いました。H は、二〇一六年十一月二十八日、SNS にこんなことをあげています。“詩を書きたい”共に詩を書いていた仲間が性暴力事件に巻き込まれたこと。胸が痛んでなりません。H の詩は素晴らしく、私のようなひよっこでもない彼が、このような事件に巻き込まれたこと。まる。私はしばらく考えました。しばらく詩を書けませんでした。その瞬間こんな考えが浮かびました。“僕は本当に幸せな人間だ。どんなにつらくても、詩を書けるのだから”
最後まで壁を乗り越える力さえあれば、旗を持って走ることができるはずです。
この世界に属する全ての詩人たちがそうあってくれることを。H。

彼女の裸の写真を撮って、詩が書けない時はそれを見るのだと言っていました。

［続く］

（注）『加害者探求 - 付録：謝罪文作成ガイド』の戯曲は、日韓演劇交流センターが 2021 年 1 月に発行した「韓国現代戯曲集 Vol.10」に収録されております。
入手希望の方は日韓演劇交流センター（https://tckj.org/）へお問い合わせください。